

真珠湾の歴史・記憶・教育

矢口 祐人

1. はじめに

日本時間の1941年12月8日朝、帝国海軍はハワイの真珠湾を攻撃した。宣戦布告がなされる前のこの攻撃により、不意を突かれたアメリカ軍は大きな損害を被った。第一陣と第二陣による日本軍の攻撃により、命を落としたアメリカ人は一般市民を含め2400名近くにもなった。

真珠湾攻撃はアメリカ社会に大きな衝撃をもたらした。フランクリン・ローズヴェルト大統領は攻撃の日をアメリカにとっての「恥辱の日」と呼び、日本軍による「侵略」に対して、「アメリカ国民はその正義の力をもって、完全な勝利を取めるまで戦う」と宣言した。

「恥辱」から始まったこの戦争は、その後、アメリカの絶対的な勝利で終わった。「正義の力」をもって、敵を徹底的に打倒したアメリカは、第二次大戦後の西側社会における世界的な覇権を確固たるものとした。勝利を牽引した「偉大な世代」の兵士たちは、前線から戻ると、今度は戦後アメリカ社会の繁栄の基礎を築いたのであった。

したがって、アメリカ社会において、真珠湾攻撃は「恥辱の日」でもあるが、その後のアメリカの完全な勝利と繁栄を想起させる事件でもある。その意味で真珠湾攻撃は「どん底」から這い上がって栄光を勝ち取るという、アメリカンドリームにも通じるイメージを持っている。二〇世紀後半になっても、真珠湾が常に強調されてきた理由にはそういう面もあげられるだろう。

攻撃までは、大半のアメリカ人にその存在すら知られていなかった真珠湾は、今やエミリー・ローゼンバーグが指摘するように、アメリカの文化アイコンである。攻撃の具体的な内容や歴史的意義はまったく知らない者でも、「リメンバー・パールハーバー」というフレーズだけは知っている。真珠湾にあるアリゾナ記念碑（USS Arizona Memorial）は、観光施設が多いハワイのなかでも、年間100万人以上が訪れる、もっとも集客力のある施設である。

これほどまでに有名な真珠湾をテーマにした、日米高校教員向けの教育ワークショップを行おうという企画が2005年より始まった。筆者は個人的な関係から、その協力を頼まれ、これまで関わって来た。本稿では、その内容を具体的に紹介することで、特集のテーマである「歴史と和解」について考えてみたい。

2. パールハーバー教育ワークショップ

パールハーバー教育ワークショップはホノルルの東西センター（The East West Center）と太平洋歴史公園協会（Pacific Historical Parks）が合同で主催するものである。その目的はアメリカと日本の中高教員に真珠湾攻撃の「より広い歴史的、文化的文脈を提供する」ことで、その意義と記憶の多様性を理解してもらうことである。予算は運営の大半とアメリカの教員の旅費と滞在費をアメリカ人文学基金（National Endowment for the

Humanities)、さらに日本の教員の旅費、滞在費、必要な経費は太平洋歴史協会が提供している。

ワークショップではホノルルの東西センターの施設に、アメリカと日本の高校教員が50名ほど(たいていはアメリカ側が8割、日本側が2割程度)一週間集い、真珠湾攻撃を多角的に学ぶようになっている。教員の担当科目は社会(歴史・地理)が圧倒的に多いものの、これまで、英語(アメリカの場合は「文学」、国際理解、音楽などの教科担当者の参加もあった。

3. フィールドトリップ

一週間の日程は主にフィールドトリップと講演、教員間での話し合いに分かれている。フィールドトリップでは真珠湾攻撃が実際に起こった現場を訪れる。普段観光客が入ることのできない真珠湾一帯の軍事基地には、いまだに日本軍の攻撃による銃弾が残っている建物などがある。教員たちは1941年12月に兵士たちがいたその場に立ち、空を見上げて日本軍が上空から突然現れる様子を想像する。

また真珠湾一帯には攻撃を記憶し続けていくためのさまざまな記念碑やミュージアムがある。なかでも有名なのはアリゾナ記念碑である。ここを訪れ、資料館や再現映像などを見た後、海中に沈む戦艦アリゾナ号をまたぐように浮かぶアリゾナ記念碑を訪れる。さらに海軍が提供する船に乗り、真珠湾内に浮かぶフォード島に沿って一周する。アリゾナ記念碑から離れたところには、戦艦ユタ号(USS Utah)やオクラホマ号(USS Oklahoma)の記念碑もある。

さらにアリゾナ記念碑の隣にある潜水艦ボーフィン号(USS Bowfin)博物館(なお、これは対馬丸を沈めた潜水艦としても知られているが、博物館ではそのことへの言及は一切ない)、フォード島内の太平洋航空博物館(Pacific Aviation Museum)、日本軍が1945年9月2日に無条件降伏を受け入れた戦艦ミズーリ号(USS Missouri)博物館を訪れる。このような真珠湾近辺に集まる軍事博物館、記念碑を見学した後、参加者はホノルル市内にある戦没アメリカ兵士の墓があるパンチボールに向かう。第二次世界大戦のヨーロッパ戦線で命を落とした日系アメリカ人兵士の墓などを見た後、墓地の一部に設けられた日米退役軍人の友好の碑の前に握手をする。

フィールドトリップは現場を訪れるという臨場感を高めるのみならず、観光地ハワイの知られざる側面に触れるという効果もある。教員たちは「楽園」として知られるバカンスの目的地であるハワイの政治と経済が、実は巨大な軍事基地に依存していることに加え、歴史的にアメリカにとってハワイはまさにその軍事戦略的な意義ゆえに重要であったことを認識する。また、戦争を巡る記念碑や博物館の意味を考えるとという目的もある。これらの場所が一般来館者に対し、戦争についていかなるメッセージを発しているのか、それが学校の教材としていかに利用できるか、できないかを考えてもらうために、このワークショップではフィールドトリップが重視されている。

4. 講義

真珠湾攻撃の「より広い歴史的、文化的文脈を提供する」ことを趣旨とするこのワークショップでは、攻撃に関する軍事史的な情報以外のものも重視される。攻撃の社会的な

意義を考察するために、攻撃当日の基地の様子のみならず、ハワイ社会全体にとっての真珠湾の意味を考える必要性が強調される。

具体的にはまずハワイ大学ハワイ研究学科の教員であるジョナサン・オソリオ (Jonathan Osorio) 博士による、ハワイ先住民にとっての真珠湾の意味を考える講義がある。ハワイ王朝史の研究者で、ハワイ先住民独立運動にも深く関わっているオソリオ博士は、真珠湾本来の意味を考えるよう参加者に促す。そこは「真珠湾」ではなく、「プウロア」(Pu'uloa) と呼ばれる、漁業資源が豊かな地域であったこと、今や海軍施設の排水でひどく汚れてしまったことなどを指摘し、プウロアはアメリカのものでも、日本のものでもない」と強調する。アメリカがいかにハワイ王朝転覆に深く関与し、ハワイを植民地化したかを説明し、ハワイがアメリカ帝国主義に呑み込まれた国であると述べる。そして、ハワイが主権を回復する必要性を主張する。彼はハワイで人気のミュージシャンでもあるので、ギターを弾き語りをしながら、このような点を幾度も強調していく。

加えて日系アメリカ人にとっての真珠湾の意義も考察される。広く知られるように、攻撃直後、ハワイや西海岸の日系アメリカ人指導者は拘束され、西海岸では基本的に全員の日系人が強制収容されることになった。ハワイでは大半は収容を免れたものの、軍による戒厳令が布かれるなか、日系人は苦しい立場におかれた。そのような状況のなか、日系二世の多くがアメリカ軍に志願し、ヨーロッパ戦線などで活躍することになる。

日系人の強制収容の歴史は、アメリカ史のなかでも、ひとつのエスニック・マイノリティの歴史にとどまることではないという認識は近年強くなっている。(強制収容を合憲としたコレマツ判決 (1944 年) が、連邦最高裁が犯した過ちのひとつとして、アメリカのロースクールで必須の学習事項となっていることはその一例である。) しかしながら、真珠湾攻撃を日系人の歴史と絡めて学ぶという、ごく当たり前の発想はアメリカの高校歴史教育に少ないし、日本の教員も日系アメリカ人史のことは充分には知らない。このワークショップでは真珠湾攻撃を考える際に日系アメリカ人史を忘れてはならないことが強調される。442 連隊で活躍した旧兵士が呼ばれ、話をすることもある。

ハワイ先住民や日系アメリカ人に加え、当時のハワイに住んでいた、子供や女性を含む他の住民 (ローカル) の視点から真珠湾が語られることもある。また、日本側の視点も教えられる。日本史の専門家が、日本がなぜ真珠湾攻撃に至ったかを当時の国際関係から説明する。年によっては、オーストラリアや太平洋島嶼地域から真珠湾を考える試みもなされる。周知の通り、真珠湾攻撃は真珠湾のみへの攻撃ではなく、マレー半島やグアムを初め、南方への攻撃の一部であった。にもかかわらず、真珠湾だけが歴史の前面に押し出される歴史知識を正すためにも、日本軍による攻撃の全体像を考えようとする試みである。

今日の観光地ハワイから真珠湾を考える講演もある。言うまでもなくハワイには日本からの観光客が多いが、日本からの観光はいつ頃に始まったのかなどの歴史的経緯に加え、真珠湾を訪れる日本人観光客の意識に関する説明がなされる。

ワークショップのハイライトは、参加者と「サバイバー」の交流である。ハワイ時間の 1941 年 12 月 7 日の朝、真珠湾で日本軍の攻撃を体験した旧アメリカ人兵士の話を直接聞く。すでに 80 半ばを過ぎた老人がその日を回顧する。日本からの教員は、どのように接してよいのか戸惑う者も少なくないが、この場にやって来る旧兵士たちは「過去のこと」は過去のこと」という態度で淡々と話す者が多い。

日米の高校教員はこれらの講演とフィールドトリップをもとに、最終日には合同の授業案を作ることが要求される。五人一組程度のグループで、テーマや方法は自由に、共同授業を考える。最後にそれぞれのグループが他の参加者に共同授業案を発表し、ワークショップは終わる。

5. ワークショップ主催者の意図

以上のようにこのワークショップは、多様な観点から真珠湾を考えるためのセッションがいろいろと設けられている。主催者側は、すでに述べたように、それを通して、真珠湾の「意義と記憶の多様性を理解」して欲しいと願っているわけだが、さらに加えて、日米の教員の交流を通して、教育の多様性を意識してもらいたいという思いもある。

実際、日米の教員が集い、交流することで、教育の方法、前提、目的など、さまざまな相違が見えてくる。互いの「常識」が常識ではないことを意識するのである。

もっとも明白なのは言語の問題である。ワークショップの言語は英語であるが、日本の中高教員で英語を使って一週間の講義やフィールドトリップに参加できる者は非常に少ない。ある程度できたとしても、理解力は限られており、発言力はさらに制限される。アメリカ人にはこの点についての配慮の必要性が繰り返し指摘されるが、かれらも日本の教員がどこまでわからないのか、いかに話してよいかかわからない。ましてや共同授業をするといっても、アメリカの高校生や教員と自由に英語で対話ができる日本の高校生など、ほとんどいない。言語という、もっとも意識しづらい「常識」の非常識を意識することで、日米の差を参加者は感じるのである。

日米では学期やカリキュラムも違う。日本は4月から、アメリカは9月から学期が始まるうえ、世界史を学ぶ年齢も違う。アメリカではAPレベルの授業の場合、一学期全体を通して第二次世界大戦を学ぶこともあるが、日本の世界史は人類の起源から21世紀までを概観することが建前となっており、とても真珠湾攻撃に何時間もかけることはできない。日米で共同授業をするといっても、現実的には難しい。事実、5年間のワークショップで、日米間交流が実際の授業に結実した例はごく少数であった。

技術的な難しさに加え、日米の教員が抱く歴史意識の差異も徐々に明確になってくる。そもそも真珠湾は12月7日（ハワイ時間）なのか、8日（日本時間）なのか、それすら当初は混乱がみられる。誰が加害者で、誰が被害者かという、一見すると明白な問いも難しい。真珠湾攻撃では日本軍が明らかな加害者ではあるものの、沖縄や広島、長崎の視点を取り入れると、今度は沖縄人や日本人が被害者として語られる。原爆投下は「加害者」である日本人に対する正当な攻撃であると考えたアメリカ人教員すらいるなか、日本からの教員が日本を「被害者」として語ることに對する違和感は小さくない。

また日本の教員の大半は、戦争を取り上げることは「平和教育」の一環であると考ええる。アメリカの教員も平和に関心がないわけではないが、真珠湾を平和教育のために利用するという発想はあまりない。アメリカにおいて、真珠湾は国家の防衛の重要性を認識する場であり、平和の意義を考えるとこではない。ところが日本の教員には、平和を強調するため以外に戦争を語るという選択肢はない。「真珠湾を語るなら広島と長崎も、そして平和の大切さも」というのは、かれらにとってはごく自然の連想であるが、アメリカ側の教員は真珠湾と広島を同じ土俵で比較することに抵抗感を覚える者もいる。

軍隊に関する考えも同様である。日本の教員の場合、「教え子を再び戦場に送らない」というのが常識的な理念となっているが、アメリカの教員は、教え子がイラクやアフガニスタンにいる例はいくらでもあるし、兄弟姉妹、配偶者、子供などが軍人であることも珍しくない。日本の教員はそれを知り往々にしてショックを受ける。

アメリカでは、第二次世界大戦のみならず、最近のイラクなどからの帰還兵士が学校に呼ばれ、英雄として称えられることもある。学校には戦争で命を落とした卒業生を記念するための展示などが設けられていることもよくある。アメリカ人教員にとっての軍隊の「近さ」は、日本からの教員には理解するのがとても難しい。一週間程度ではこの溝は埋まらないことの方が多い。

このような差異は、参加者の不満を生むこともある。とりわけ人数的にも少なく、言語的にも「不利」な立場にある日本からの参加者からは、文句が出ることもある。それに適宜対処するのが、筆者を含むワークショップの主催者の仕事であるが、主催者としてはそのような日米間の差異が意識されることは望ましいと考えている。歴史や国際理解を教える者が、自らの「常識」が別の国では必ずしも常識ではないということを理解するのは、悪いことではない。ワークショップのフィールドトリップや講演の趣旨は、真珠湾を複眼的に考えることであるが、そこに参加する個々の教員たちには、自らの立場をもより相対的に捉える努力をして欲しい。そのためには、教員としての前提や常識、あるいはアイデンティティまでもが、多少なりとも揺るがされるような体験があった方が望ましいと主催者は考えるのである。

6. ワークショップが生みだすもの

筆者は主に日本側の参加者の選考に加わり、「お世話」をする立場にあったので、ワークショップ終了後、かれらの意見を聞くことができた。ワークショップ参加者の反応はさまざまであったが、毎年の印象を大別すると、上に述べた主催者の趣旨は比較的成功しているようである。参加者の多くはこのワークショップが「想像以上」にハードであったと同時に、実り豊かなものであったと強調している。とりわけ軍の存在を巡るアメリカの「常識」と、平和教育の大切さという日本の教員には「当たり前」の前提が、両国では必ずしも共有されていないことに対する驚きと戸惑いは繰り返し指摘されてきた。たとえば、ある参加者は以下のように述べている。

「戦争」というものをアメリカ政府・アメリカ軍（アメリカ人というよりも）がどのようにとらえているのかを知ることが出来た。「軍」は生活の一部であり、アメリカは「正義・平和・自由」の為に戦っているのだということをアメリカ国民へ知らしめることを目的にした施設であった。また、退役軍人に対する敬意の表し方など、日本では見られない場面も興味深かった。「軍隊」という組織に対する意識の違いを実感できた。

この参加者はさらにワークショップ全体で、真珠湾を「後世に引き継いで『平和』をどう構築していくかの視点が無かった」ことを問題視している。

その一方で、同じ教員として共有することも多いし、結局「教員として平和を大切にす

る心は同じ」であるという感覚を抱く者もいる。言語や前提の違いなどの問題は多いが、それでも日米の教員が対話を通して、意思疎通を図ることの大切さを多くの参加者は唱えている。ある日本の教員は、ひとりのアメリカ人教員との一週間の交流を以下のように記している。

南部出身のアメリカ人教諭の変化は著しいものがあつた。ほとんど話したことの無い私にも最初は日本に対して敵意すら感じているのがわかつた。また、「多角的な視点」にさして興味もなさそうだった。その彼が最後の発表で「ここにくる前には日本人側の主張などを授業で取り入れようと思ったこともなかつたが、この1週間で様々なことを学び、新しいことを授業にこれから取り入れていこうと思う」と言った。この発言と彼の中の変化はこのパールハーバーワークショップの大きな成果であつたといつても過言ではないだらう。

主催者側である執筆者にとって、このようなコメントを紹介するのは、いささか自画自賛の感も否めないが、ワークショップは概ね好評に受け止められてきたと言えるだらう。ハワイで学んだことを、各教員が帰国後、授業の実践に取り入れている例もある。ワークショップは小さいながらも、日本の教育現場に影響を与えていると考えたい。

とはいえ、同時に、真珠湾のワークショップのすべてが成功であるとは言えないのも確かである。むしろ、地域研究や歴史教育研究という観点からみると、当ワークショップのような試みが生み出す問題点は少なくないと思われる。

最大の問題は、このような教育ワークショップの形式が、国による差異を自然化し、強調する効果を持つことである。アメリカの教員と日本の教員が集まり、アメリカと日本の視点を交換し、相互の差異を認識し、交流を約束するというのは、姿としては美しい。日本人として、いかに過去を考え、そして未来志向の対米関係を築いていくかを考えるのは悪いことではない。文部科学省の「高等学校指導要領」の「目標」である「近現代史を中心とする世界の歴史を、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、人類の課題を多角的に考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」という精神にも合っているだらう。

しかし「日本人としての自覚と資質を養う」などという、「国民化」の装置としての歴史教育を批判的に捉えるならば、このワークショップは「日本人」「日本人の視点」なるものを安易に本質化することで、まさに国家が目論む「国民を生み出すための歴史観」に回収されていると言えるだらう。戦争記念碑などを訪れることで、日米の差異が繰り返し認識される。それぞれがどちらに帰属するべきかは明白で、その帰属の根拠は何であるかは考察されない。日米が協力し、友好関係を築くべきであると強調されるものの、両者を分け隔てる境界線の維持と強化に、真珠湾攻撃をはじめとする歴史教育がいかに共犯関係にあるかという点については十分な注意は払われない。その結果、ハワイ先住民の独立の可能性は論じられながらも、結局はハワイもハワイ先住民も「アメリカ」に帰属するとみなされてしまう。また日系アメリカ人は「アメリカ」に帰属しながらも、その一方で「日本」の文化を維持してきた人びとと捉えられることで、かれらは日米両方の要素を持つ人、それによって悲劇を体験した人と位置づけられる。真珠湾を前に、日本とアメリカと

いう存在は確固とした客観的実体として顕在化し、歴史教育はそれを強化しこそすれ、覆すような機能は果たせないままである。

つまり、戦争記念碑をもとに多様な語りを取り入れようとするこのワークショップは、日米という国家の枠組みを超越するものではない。戦争を生み出した国家という意識そのもの、そしてその意識を自然に共有させる文化装置としての歴史教育、このようなことを省みようというところにまでは行きつかない。むしろその前段階ともいえる、日米の差と距離を意識し、それを埋めようとするところで、終了してしまうのが現状である。

筆者は、このようなワークショップは、日米が共有できるひとつの歴史を生み出すのを目的とすべきではないと考える。「日本」「アメリカ」という国に基づいた歴史のあり方そのものを問いなおすためには、日米史としての真珠湾を考えるだけでは不十分である。むしろ真珠湾を考える際に必要な多様な視座を取り込むことで、国家単位で歴史を語ろうとすることの問題を、個々の教員に意識し、考えてもらうことが重要である。日米のみならず、多くの国の歴史教育でも当たり前のこととされている、国を中心に据えた歴史観を再考することである。むしろ、それをするために、戦争や戦争記念碑など、国単位の衝突が最も如実に表れる現場を選択するのは賢明ではないという指摘もあるだろう。しかしながら、まさに国が最も顕在化される戦争を取り上げながら、国家単位で過去を語ることの矛盾や問題点を真剣に教員たちが考えるということは意義深いのではないだろうか。個人的には、真珠湾のワークショップの潜在性をそこに見出した。

7. 結論に代えて——大学教員とペダゴジー

このような限界と可能性を毎年感じながら、筆者は真珠湾の教育ワークショップに関わってきた。アメリカ人教員と日本人教員を同時に集めることのできるのは7月末から8月の初めのみであり、当然大学人にとっては学期末の多忙な時期である。それだけでも困難であるのに、周囲からはハワイに行くというだけで散々羨ましがられ、実際に行けば朝から晩まで参加者の世話に追われる（病気になる人、ストレスで動けなくなる人、文句のある人、いろいろである）という状況であり、「果たしてこんなことをいつまで続けるべきか」と考え込むことがないわけではない。

にもかかわらず、これを今まで続けてきたのは、毎年のように中高の教員と交流するなかで、大学におけるペダゴジー意識の欠如を痛感するようになったからである。中高教育において、「歴史的思考力」をいかに伸ばすかを日々考え、工夫している教員たちに比して、われわれ大学で教えている教育者は一体何をしているのだろうか。何を、いかに教えるべきか、学生たちの歴史的思考力をいかに培うか、このようなことを真剣に考え、意見交換や勉強会をする教員は東京大学に果たしてどれくらいいるだろうか。教育のために一週間も年休をとり、海外でバストイレ共有、相部屋の寮生活を送る教員はどれくらいいるだろうか。私自身を含めて、ほとんどいないのが現状であろう。

高校の指導要領が「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」となっているのであれば、大学がなすべき歴史教育は、学生たちにその歴史的思考力の再考を促すことであろう。「主体的に生きる日本人」とは何なのか、日本人以外が多数住むこの国の指導要領が「日本人としての自覚と資質を養う」ことを目標としていることの問題点はどこにあるのか、そのようなことに私たち大学人は、高校の歴史

教育を受け継ぐ形で取り組まねばならない。実際、指導要領に釈然としない思いを抱きながらも縛られている教員は、そのようなことを大学に期待している。

筆者は中高教育の現場に立つ教員のさまざまな努力と苦勞を、ワークショップを通して初めて知るようになり、多くを学んできた。「歴史と和解」を考えるには、まずは中高教育との連携を大学人が深め、4年ではなく7年、10年のスパンでの「考える歴史」を、これからの世代に伝えていく方法を模索しなければならないのではないだろうか。

(注 本稿は2010年11月13日に行われたシンポジウム「歴史と和解——歴史教育の現在」で発表した原稿に多少の加筆、訂正を行ったものである。)